

機関番号：27101

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520706

研究課題名 (和文) 近代日本における語り芸研究の方法論の構築

研究課題名 (英文) Constructing Methodology for Researching Narrative Performances in Modern Japan

研究代表者

真鍋 昌賢 (MANABE MASAYOSHI)

北九州市立大学・文学部・准教授

研究者番号：50346152

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、近代日本の語り芸をめぐる実証研究に取り組むなかで、研究方法論の構築を目指す。主に取り上げるジャンルは浪花節である。提案される研究方法とは、「メディア形式の比較研究」、「演者に焦点を定めた表象技術の変容史」、「受容史的アプローチによる演者／客の関係性の分析」「領域横断的な研究ネットワークの構築」である。また本研究では近代における資料として SP レコードに注目し、分析対象としてとりいれた。これは口承文芸研究においては、これまでにない新しい展開である。

研究成果の概要 (英文)：

The aim of this research is to construct methodology for Narrative Performances in Modern Japan. With the empirical approach, the genre that this research mainly takes up is *Naniwa-bushi*, story-telling performance accompanied by Samisen. Methodology experimented here are as follows: Comparative research on Media forms, Historical study of how Performers' technique of Representation transformed, Analysis of the relationship between performers and audience with the approach of History of Reception, and Constructing Research network across different fields of studies. In addition, this research also analyzes SP records as data of *Naniwa-bushi* Performances, which is to contribute new development in the field of Oral Literature Studies.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|-------|-----------|-----------|-----------|
| 20 年度 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |
| 21 年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 22 年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 総計 | 3,500,000 | 1,050,000 | 4,550,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：口承文芸・メディア・語り芸・文化史・浪花節・漫談

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまでプロフェッショナル (専門的) な語りをとりあげるなかで、民俗学と文学の境界領域である口承文芸研究に携わり、研究領域の拡張と方法論の刷新のために実証研究、また学史・理論研究に取り組んできた。

プロフェッショナルな語りは、現代のわれわれの生活の根幹にある大衆社会の社会

観・人生観・生活感情を再生産・更新するうえで一定の影響力をもってきた。近代日本におけるプロフェッショナルな語り、「語り物」という伝統的なジャンルのもとで視野に入りにくかった理由は、①前近代的な消滅しつつあるジャンルを研究対象として重視してきたこと②内容分析に比べて芸の演出分析が軽視されてきたこと③言語・身体芸術の研究分野の細分化などが挙げられる。研究者

の視点の固定⇨老朽化によって、「語り物」研究の範疇において近現代の研究対象を積極的にとりあげることが困難であった。最も重要なことは、「語り物」から先鋭的に問題化できるはずであったプロフェッショナルな言葉の技術への注目が鈍り、言葉のパフォーマティブな側面についての探求があからさまに遅れたことにある。本研究では、いまだ資料論・研究方法論の蓄積が希薄である「芸」の側面を強調するために本研究では「語り芸」という概念を設定した。

2. 研究の目的

本研究は、前近代に前身をもちながらも、複製メディアによって、大衆社会に対峙していく「浪花節」を中心としてとりあげ、さらには近代の活動弁士を前身にもち大衆社会に対峙していく「漫談」という対照的なジャンルをとりあげて、近代日本における語り芸研究の方法論が、どのような方向に向かうべきかを、論文作成・研究会開催のなかで議論し、明らかにすることを目的とした。また浪花節については、将来的な演目の網羅的把握を目指すために、基礎作業としてレコードタイトルのコンピュータ入力をおこなった。

3. 研究の方法

1) 仮設小屋(常設小屋以前)[成果(4)①に対応]、2) 劇場化[成果(4)②に対応]、3) レコード化[成果(2)に対応]、4) メディア環境の複雑化[成果(3)に対応]という4つの史的段階を設定し、浪花節の事例研究に取り組んだ。また漫談については、1920年代後半から30年代を通して、隆盛していく過程を史料収集のなかで追尾する方法を採用した。

いずれの場合も、メディアとの関連、演者／受容者の関係性に注意しつつ、表象の特徴を分析し、浪花節・漫談以外のジャンルとの比較研究を可能にする研究方法の考案にむかうという方法をとった。また同時に資料開拓(SPレコード、速記本、雑誌など)、他分野の理論参照を積極的におこなった。特に重視したのは、文芸批評における受容理論、読書論・読者論、メディア論である。

4. 研究成果

(1) SPレコードの活用をむけて一浪花節SPの演目名調査—

レコードコレクター・森川司氏の協力を得て、浪花節SPレコードのタイトル名のデータ入力作業をおこない、基礎情報の入力をほぼ終えてた(ただし、表記の統一などの検討事項は残されている)。演目1点(1枚もしくは複数枚で構成されている)を1件として数えた場合、入力件数はのべ4955件である。入力ルールについては、以下のとおりである。

- ・同一原盤の再発売などもそれぞれ別に扱っ

た。

- ・1組全体が所蔵されていない演目も、1件として扱った。

入力データのなかで代表的な演者(50件以上)を挙げると、寿々木米若246件、3代目吉田奈良丸211件、2代目広沢虎造154件、梅中軒鶯童139件、酒井雲136件、東家楽燕125件、2代目天中軒雲月125件、浪花亭綾太郎125件、初代天光軒満月119件、3代目鼈甲斎虎丸115件、初代京山幸枝103件、2代目吉田奈良丸103件、2代目日吉川秋水95件、四代目宮川左近89件、富士月子88件、初代京山小円80件、木村友衛71件、春日井梅鶯66件、2代目玉川勝太郎66件、初代天中軒雲月65件、初代篠田実64件、初代広沢駒蔵59件、木村重友55件となっている。

上記のデータは、森川氏からお借りした私製の目録をもとに得られたものである。今後森川氏所蔵のSP現物と目録情報の照合をおこなう予定のため、若干の変動がみられると予想されるが、これらのデータと他の機関が出版しているレコード目録との照合により、浪花節SPレコードのより一層の網羅的な把握が可能になると考えられる。今後の情報整理・分析にむけての前提を整える成果を得た。

本研究の論文執筆との関連としては、全体における女流の占める割合を明らかにできたことは大きい。確認された女流のSPレコード564件であった。これは全体の約11%である。この対比は、実質的な発売された浪花節SPレコードにおける対比とほぼ対応していると推定される。男性中心的な物語の継承が、どのようなジェンダーのバランス(演者の性別比×物語内部のジェンダー構造)のうえに展開していたのかを知るうえで意義をもつ。入力件数の結果及び2代目天中軒雲月の論文作成(成果(3)参照)から見えてきたのは、演者の性別をこえた演目の共有、女流用書き下ろされた演目の登場という、浪花節における重層的なジェンダー再生産の構造である。

今回の調査が他の目録や所蔵情報によってより補完されていく必要があるが、浪花節のSPレコードの全貌を知るうえで重要な情報となることは間違いない。こうした網羅的な演目情報の蓄積は、浪花節研究においてははじめての試みである。

(2) メディア形式の比較研究

[取り組みと研究成果]

近代の語り芸研究に現在求められているのは複製された声を、どのように研究対象にするかということである。近代独自の資料群を検討可能なものにするためには、その形式の特徴を理解することが求められる。本研究から提案されるのは、メディア形式のもつ意

義を各種メディア形式との比較のなかから議論する方法である。

具体的には、2代目吉田奈良丸のSPレコードが他のメディアとの連関のもとに受容構造を転換していったことを明らかにするなかで、その方法の有効性を検討した。速記本・一節集・稽古本との相互関連のなかでSPレコードが受容構造そのものを変容させていくこと、また部分性・断続性・反復性のもとに、声が提供されるなかで、テキストをとりこみ演じ直す匿名的な身体（マネル身体）が大量に生み出されていったことを明らかにした。

またSPレコードの収録時間の制約が、演技（吹き込み）にどのような影響を与えているのかを考察した。浪花節においては、興行用の演目が再構成されて吹き込まれるのが一般的であり、フシを柔軟に使いこなしながら演目の再編成がおこなわれたことを明らかにした。奈良丸をはじめとした1910年代の浪花節のレコードからうかがえるのは、たとえば演目終了（切り場）の再設定である。またレコードというメディアへの対応は業界で一律化していたわけではなく、演者によって差があった。

[成果の位置づけ・比較研究の可能性]

口承文芸研究において、メディア形式こそが分析対象であることを強調したことは、口承文芸研究の領域においてインパクトを与えることができる。

レコード産業黎明期のSPレコード形式への対応は、おそらくジャンルによって、演者個人によって特徴がある。ニューメディアによるはじめての声の複製という局面に、どのような技術で対応したのかという問いは、当該ジャンルにおけるSPレコードの位置づけを論じることにもつながっていく。

(3) 演者に焦点を定めた表象技術の変容史

[取り組みと研究成果]

SPレコードなどの複製史料を利用することにより可能になるのは、演じ方の比較研究である。1920年代後半～30年代、つまりレコードの電気吹き込みがはじまり、ラジオ、トーキー映画が登場していく時期に焦点をあてて研究をおこなった。具体的には、2代目天中軒雲月の表象技術がどのように形成されてきたのかを考察した。銃後・家庭・性別役割・同時代というテーマが複雑にからまりあいながら、レコード産業が介入するなかで雲月の声がつくられていったことを明らかにした。雲月は「七つの声」というキャッチコピーをもっていたが、それに相応しい演じ方は、テイチク所属以降、特に「乃木將軍信州墓参」・「杉野兵曹長の妻」以降であった。

幼い男の子の声を皮切りとして、世代・ジェンダーなどの演じ分けを売り物にしていき、次第に浪曲作家が雲月の「七つの声」を念頭において演目がつくられていくことを明らかにした。

[成果の位置づけ・比較研究の可能性]

SPレコードを補足史料・傍証とするのではなく、直接的な分析対象としたことは、口承文芸研究において先駆的な意義をもっている。

演じ方の変遷をひとりの演者のなかで追う方法は、マクロな社会動向、ミクロな技術レベルの変化、それらをつなぎとめる個人の動向を交差させる可能性を内包している。また演目分析、ジャンル全体の動向分析を相対化する意義をもっていると考えられる。

(4) 受容史的アプローチによる演者／客の関係性の分析

常設小屋での語り芸としての浪花節の歴史を理解するために、二つの研究をおこなった。

① 対面空間の演者／客の関係性についての分析：仮設小屋

[取り組みと研究成果]

浪花節が常設小屋（寄席）にあがる以前、つまり明治初期の仮設小屋時代における客の経験を明らかにした。演者の技量と聴衆との場にそくして、「客」という役割を「演じる」ことを受け入れるか否かが左右されたことを明らかにし、「木戸銭」が演者／客の関係性を構造的に転換していく契機であり、常設小屋以降、外部の者を「客」にするための工夫と内部で「客」を満足させる工夫がたがいに関連しつつも別個に練磨されていくことを明らかにした。

[成果の位置づけ・比較研究の可能性]

どのようにして限られた歴史史料から口演／受容の現場を再構成するのかという問いはジャンルをこえて共有される資料論である。観客論は芸能史研究の重要課題であるが、具体的な方法論（史料認識論）が論じられることはまれである。空間のセッティング及び演者／客の関係性を歴史的展開のなかで論じるという本研究の方法は、芸能史の受容史的研究の前進に貢献する成果であると考える。

また一方では、対面空間で培われた技術がメディアに媒介されたときにどのように流用されるのかを論じる間メディア的な比較研究にもつながっていく可能性を提示できた。

②日露戦後における受容構造についての分析：劇場化

[取り組みと研究成果]

1907年(明治40)の大阪における桃中軒雲右衛門の口演がどのように受容されたのかを、見聞記をとりあげてその視線を位置づけ、当時の大阪の一般的な浪花節席との比較を通して記述した。改良の機運、雲右衛門についての風評のなかで構成される受容の地平、あるいは客の期待を明らかにし、また違和と衝撃が入り混じった雲右衛門の受け止められ方を明らかにした。

[成果の位置づけ・比較研究の可能性]

受容を論じる際の重要な史料群として批評(言説)がある。批評をその位置づけとともに論じ、演者の受容論に接合した点において本研究はユニークさをもっている。一元化されない受容・期待の在り方を提示するうえでは、批判的な言説を排除するのではなく、むしろその存在意義を位置づけることが必要になる。重要なのは、その批評内容そのものよりもむしろその批評の背景(発言者の社会性、発言時の状況など)をいかに厚く記述できるかという点である。妥当か否かという観点から離れて、批評の社会性の分析をおこなうことが語り芸研究に応用されていく可能性を提示できた点において本研究はインパクトをもつと考えられる。

(5)漫談についての基礎資料の収集と隆盛の経緯についての分析

ジャンル生成過程の調査、漫談家・大辻司郎の表象分析を通して、レコード、トーキー、雑誌、ラジオなどによって複雑化する時代において、漫談が、声のリアリティが再編成されていくなかでカテゴリー化されたジャンルであったという仮説を提示した。ラジオ・トーキー時代の雑誌というメディアのなかで、漫談が声の軽やかさをつかまえる方法として重宝されたことを論じた。

(6)研究ネットワークの拡張と新たなテーマとの接続

本研究では、近代日本の語り芸研究会(映画上映会を含む)を開催し、「声」をテーマとする研究分野の交渉を積極的におこなった。この研究会はまた、大阪大学文学研究科共同研究「声」の資料化の諸問題」と連動することにより、効果的なネットワーク形成が可能となった。

口承文芸研究、音声学、芸能史、哲学、映画史、音楽学の研究者と連携を深め、今後の

研究のさらなる展開を可能にした。特に音声分析の結果を文化史的背景と接合するために、「文脈の厚い記述」が重要であることが確認された。また近代から現代にかけての口頭芸(アナウンス、実況、ラジオ深夜放送、吹き替え)を視野に入れた比較研究という新しいアイデアを検討していくことが可能となった。

(7)本研究の成果の総括

ここまで述べてきた成果をふまえて、本研究の総括的意義として付け加えておきたい事項を3点にしぼり記す。

①声のカタチの緻密な議論によるメディア文化史批評の可能性

成果(2)~(5)にかかわるポイントとして、メディア論的な発想を、語り芸研究が積極的に取り入れていくべきであることが改めて明らかになったと考えられる。これまで口承文芸研究は、声/文字の対立軸については敏感であった。しかし近代を扱う場合、多様な複製環境のなかに声がおかれていく状況をさらにアクチュアルにとらえなければならぬ。口承文芸研究において複製された声を、メディア形式そのものに留意しつつ論じた研究は少ない。その点において成果(2)は、新たな方法論提示となったと考える。また成果(1)はその意味で口承文芸研究における斬新な切り口を用意するきっかけとなる。さらには、活字においても雑誌、新聞、速記本などの異なる存在意義を明確にしつつ声の表象を理解する必要がある(成果(2)(3)(5)参照)。こうしたメディア論を意識した口承文芸研究が、メディア文化史を声という視点から批評し直す可能性につながっていくと考えられる。

②ジェンダー論の可能性

また本研究では、語り芸研究が、声という視点からジェンダー論的なアプローチを展開していける可能性を提示できたと考えられる。演者の性別、演じられる人物の表象これらの交差からかもしだされる物語世界を説明し直すことにより、どのような感性・価値観の再生産に語り芸が関与している(してきた)のかが本格的にテーマとして意識されることになる。

③受容論のための演じ方研究

演じ方(パフォーマンス)の特徴を記述し論じることが、受容を論じる重要な方法であることがあらためて明らかになったと考えられる。つまり文字化できる声の情報(物語の内容)だけでは、どのように受容者との関係が結ばれているかについての理解を深め

るには限界がある。SPレコードなどを用いて芸を論じることにより、どのような関係を聴衆（観客）と結ぼうとする言語行為（表象行為）なのかを論じる可能性が一層開けていくと考える。演じ方の解釈ルールをどのように共有していくかが、今後語り芸研究の課題となっていくだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ①真鍋昌賢、語りを観る―批評の共有にむけて―、口承文芸研究、査読無、34号、2011、163-166
- ②真鍋昌賢、戦時下に響く「七つの声」―二代目天中軒雲月の演じ方について、口承文芸研究、査読有、33号、2010、102-108
- ③真鍋昌賢、メディアの重層性、媒介されるテキスト、説話・伝承学、査読無、18号、2010、227-231
- ④真鍋昌賢、漫談とは何か―口承文芸研究の新たな課題として―、国文学 解釈と鑑賞、査読無、73巻8号、2008、87-93

〔学会発表〕（計1件）

- ①真鍋昌賢、戦時下に響く七色の声―浪花節における二代目天中軒雲月の位置づけ―、口承文芸学会第56回研究例会シンポジウム、2008年10月25日

〔図書〕（計6件）

- ①後藤静夫編、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、近代日本における音楽・芸能の再検討、2010、137-147
- ②岡田祥平・真鍋昌賢、大阪大学大学院文学研究科、平成21年度大阪大学大学院文学研究科共同研究「声」の史料化をめぐる諸問題―人文的研究基盤の構築をめざして―、2010、1-9及び11-14及び35-41
- ③吉見俊哉・土屋礼子編、ミネルヴァ書房、叢書現代のメディアとジャーナリズム4 大衆文化とメディア、2010、86-106
- ④竹村和子・義江明子編、明石書店、ジェンダー史叢書3 思想と文化、2010、281-282
- ⑤川村邦光編、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室、家族写真の歴史民俗学的研究（平成18-20年度科学研究費補助金研究成果報告書）、2009、132-137
- ⑥小松和彦選歴記念刊行会編、法蔵館、日本文化の人類学／異文化の民俗学、2008、450-463

6. 研究組織

(1) 研究代表者

真鍋 昌賢 (MANABE MASAYOSHI)